849
55
帙入

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

地震後世俗語之種

初編之一

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

二字点不知

傳聞地震は陰陽の昇降浮沉の遲速に
より發行して雷となり地震となるが
どかや春夏秋冬に臨て浮沉前後の
差別巡還あるといへども豫春寒退兼
て惡風を起し立夏より夏至に及ぶ
のころ冷氣にして地を震秋暑難去
さて邪氣残發し立冬より冬至に及

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

すれこそ暖氣にしたゝ地震ふ事其例少
かゝれ茲皆陰陽不順なる自然と不正の
病苦を流行し草木にあたるとかや水
火の勢大空にまきあひて雷となり百里
に響ふいへとも障なき我もつて不動地中
無是障多かゆゑに大地を動すといへり
茲皆陰陽五行五性の變化なる發行
すなはなりとかや

849
55
特別

今爰に弘化四年丁未歳次清明の下旬
二十四日の夜亥の初尅天災不思議なる
大地震を發し信濃の一國を大に
破損を就中水内高井埴科更科
築摩の五郡地水火の三災をもつて
人民牛馬および山野田畑を損辜前
代未聞にして言語に絶たり此變化
まなる事を奈何其豫愚毫を止めて子

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

孫累世の多人をみに書殘事は思慮なれ
といへども幼時不勤學老後雖恨悔尚所
益有こゝをもしらしめや我今紙を撫筆
を詠ふまで先後の有增を案ともいへども
何から先も不能思案こゝては尚更混
雜不埒親の教訓も午の耳悔んで還
らぬ無學愚知述懷なれハ金輪際
俗物ブウニニ俗語なるまで笑ふ子孫も

あはちからは草葉の蔭まで歡ぶし彼を
思ひ是を厭ひ徐々思案を一定し錢釘
元祖の手跡ても瓢單鯰の文章ても書
遺をへあるからハ後世までも盡せしと
おそまゝ思案の後悔は茲畢竟幼
時不勤學の由緣なるべし これ書ハ
おろか書類をもいらせることのと麁抹
まし 禎下張屑紙ハ用ゆる事を

必ずも嗜慎給へかし俗語のへせに長
文句を誹謗もおひたる春の夜の笑の
種ともなまかしかる子我覽事親に
しかれ可恪後悔なほハ唯家に記錄
なきこそ我のこ

于時弘化丁未の夏麥園に假居の
折節徒然のあまり閑窓の下に
塵を拂十六夜の月に照りを行
燈の影に写し大たもむきまして
子孫のなくさみに遺す事たのす

粟生菴清陰

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

其本末白地而美言除只
恣後世之傳訛言誤頗雖
多不愚他見之輒嘲而子孫
之憍情愛兼可耻我拙歟
因後世俗語之種表者也

人王三十代欽明十三年壬申十月十三日
自百濟國聖明王貢獻佛經之云

善光寺如来自百濟渡来之圖

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

人王三十一代敏達二年如来自難波之
堀江出現同十四年守屋大臣再如来ヲ
難波之堀江ニ沈メ及佛閣經巻破却ス自
欽明十三年五十四年ヲ過如来難波
之堀江ヨリ出現

倭漢三戈圖會巻之第六十八

信濃國善光寺　在水内郡芋井卿寺領

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

千石　欽明天皇十三年本尊如来自百濟
渡来而未倍推古天皇十年草創建寺於伊
奈郡麻續之里宇沼村而後皇極天皇元年
依勅移水内郡建立本願主名本多善光因
以為寺號慶長二年七月秀吉公以本尊奉
入於洛之大佛殿然佛不悦而有奇崇故同
八月復奉還焉

幸一謹寫

犀川渡船の畧説

自丹波驛河原長一所謂
吹上荒木中所所石堂善光
寺まで一里の間家續なり

三船を自つて旅行我渡をいとも紙中挾けまは結て其
畧圖我出をのこる利

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

小人罪居さるゝ事我成す幸一幼少にして
父母の恩愛を恣にし示考ましく教訓我
等家にて今愛に後悔朝夕たりなりしとも恩罪
身にまとひて人家に無學の恥辱我をうけ可
惜可怖罪過消滅懺悔の大なる已か病根を家に
於いて子孫に伝る養父病に臥志給ひて終に遠行
の旅路におもむき給へといへとも若年にして

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

看病の急るゝ我覺實母此世我者諸ふといへども
只まゝたのめし年種て後ふ行跡まして
江府にありし實父は病ひ便まるゝ國に旅立候ふ
それはとも志らは父母居れ所なる遠遊せを是聖賢
の教をまもらせ給はれ後悔也 自らなせる禍ひ難
遁ふ順にして恥辱を抱て再國に歸る實母
は腹立給ふを慰の詫我乞願ふといへども只を心
なし其志ゆへ家にして數日假居志て妻ると

共に憂辛苦をするにいへども固窮愛に止まて
朝夕患多し折しも夏は日の夕立簾をつゝ
かめし雷鳴耳我はらぬ電光目に遮り
おそろしさいふも尋常なり此時已驚怖
志て是を思ふに酉夢に其父天雷裂其
身斑婦罵其母靈蛇吸其命指我おもて
罪を數るゝ三枝反甫の禮をもたらは已の祭
に孝なることのあらて誰か現罪我蒙らせ給

為に今まで一身撮み裂るべし其苦患堪ふ
多く犯氣のぬべしを有けるかたらんべて雨晴
電光止ぬ愛において懺悔たる已か不孝にし
て父母に遠行我殊り多しかせば養家
我継て不行跡乃科何事今有路途に迷ふ
とて身儘にして再家に帰らんるを欲を養
母憤りて免し給ハを是畢竟已か身我
恨むるより他なるし妻子なんは剃髪たて

蓄提心我費し若不幸におちいる為に蓄氣
も何らは此一條を談合せしやむ心痛
たまきはしきて是我悲む痛ましきかなそ遠
なる此かゝ風雨我怖まし物に驚久す骨髄
に染込て道にて事を得ば是則已の病根
まさに驚痛に耻我費し療養我加ふ
いへども治しかたく脳めなす中に語る耻
為紀るすなはけ事夜に至か娘順を養母の

愛情我蒙りて成長したるはものゝ
祖母と孫との愛情は橋の事詞を繼に詑と
なる免し給ふ事是我思ふ所なり 爾子我愛
其孫を惠む事は情合子を見ゆる親に
志りは有かましといふ事なるかなる事し
程經て養母も重成病に臥して給に遠に
赴給ふ此時始て看病我もし野辺は送り
をも勤めけれはおのまゝなるに勸念して

なる勘考しける心に無墨染の神に世にもを
我おほをいへとも煩脳まてかゝる妻子の行先
に迷我尚不顧罪我重ぬるゝに我おそろ
しきれ養母のそかなる成給ふ看病の外
孝に似寄るはなるけれは自ら改めて名
乗我孝一とす此うへの未熟我世の人に忘る免
未熟を不患たゞ罪我滅し是我子孫の孝
ひまは一ツ無萬物のもしめるれは幸一

過て改るにそこのまゝなるかまたに記を大災の
書を後悔にしたく其子細愚なりけれども
綴りて是我見るに書寫したなほ已ふさへ可
笑み往事に於ふうるをみまた尚閑我祐
らひて書損我改め清書をなす我欲を稽
とも病苦に過ぎは其是事全かゝるをや
紙数は散失なれば我欲の儘に先是を
假にかゝしてこゝ於是そのや若行届ことして

清書我遂を此儘子孫に送らはその稽すを
必誹謗あるべきなれば此事已ふ無學病
根乃罪過を懺悔消滅のたゞん寔に書かへ
るなれば子孫に至り後悔の二字我深慎み
取返しかゝる事我可怖實に前車の
見覆後車は為誡事を傳へる而已

栄生庵主
善北斎門
幸一

幸一打節し眼病に痛を
絶めるまゝに悴ー貝殿に筆我讓
思ぬ文字假名遣も多く屋を作と
いまゝ若輩なまゝハ有利也教
ゝる覧我伯奉願のこと

爰に善光寺如来の傳書に似寄又
當所に繁花を記せしるす不屑にして物
知見なし亦此書我遠國他人に送るも
非ざる事を徒に紙数我費し恩毫を
はらはに等し子孫累世に及ひて是我
見ん時者奈何嘲笑を屋ぬもなかるん故
思ひ知りに満足は罰るのなるひと以へ此ゝ
遠境隔所の通客を山國を侮り物をと
鳥獣に乞とし久人習に回足なる我怪ひ

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

度に今此小冊を誌して読に騎平家の
久から待る事を子孫に語る傳て少天明
此比始て當家へ雪駄二足代商人の
物来るを我是を求得て試見んるを
詳義通ることなるや後に六七拾年余
此今に至りて此天鵞絨此二重細も昔の
事に如かひやもたゝ思様留役をこのみ
有初年文化此頃も適て来かるの事を
答應をと以とも門津のさ役一森なんとの
奥茶代極最とは後に二十五余の事なれ

今まゝ至りてハ都の辰巳しかてすむ世代の治
山の撰葉も差別代論して是代者とは
如斯驕奢に押移る事天の惡もまゝ恐
怖を為し人間生死代案を為時を流行
榮花を深く語しみ四海皆是尼才たる
事代勅てもつて長子孫代連續をへし
今百より大災代受て暫時に繁花を昔
にかへらしむかゝる盛衰代眼前に見る
事代回ひ徒耳筆を採て氣禁代
代上に書て累代のちくさゝに誌を

此ニ本書因て覧人矣を見し給へかし

抑當國善光ゟ三尊滿絶如来の来由是ニ遍ク人
世ニ信仰ニ志家所ましく灵驗殊ニいちしるし
三國傳来の傳書よ事人皇三十代ニ帝
欽明天皇の御宇ニ付見て日の本に渡らせなひ
三十六代ニ帝　孝極天皇蘇生御まもの
縁ゟ寄昔時本多善光へ勅命ゟ諏方ニ國へ
供奉して安置まし御ニ今ニ呼て伊奈郡座光ゟ
是ゟ天平三壬寅年諏訪の再ニ信濃ニ國ニ

何ゟ多見同國芊丹の御ゟ遷し奉ゟ此時高
逢ニ郡諏訪明神の神職高何乃縁ニ成て
本多善光と俱ニ供奉し一山ニうちいまの
中ニ血脈ニ止見て連續ニ今ニ多ほ
御佛御超歳の御宮なりとて忍多くも
公義御普請の一宇ニおいて御是二年の日ニ
夜を秘密ニして行之此夜ニ何ゟ事て市町乃
人家是いふ事ゟ多ゟ島獣多ニも小声一言を
慎まんハ必神の祟何りとて ひそよりかへ何ゟ
恐怖を御超歳の首尾能滴たるゟ我大鐘四方ニ

寄此時我得て集結群集たるものこその例し
今毛なほ昔り変る事なし是全神職
血統乃修行に寄る事しを秘密なるは其
豫詳なる事我志しは今乃御堂より乾ゆ
箱清水村より四方參羊丹の郷まして一邑此
地中我深田の口といふ村入の所にて十人河原
より是ゆ昔如来通経此料にして深田乃口まいて
二百石我十二院へ移ふなほそのほとて江州三井
寺の末院たるといふ是なん一山のうち庇徒
なりとかや数百年の星霜我経て十二院を

名此を移る是我誤て當所此人今昨て十人河原
といふとかや一山四門より勅額より東門我定額山
善光寺西門我不拝山浄土寺南門を南命山
無量寿寺北門を北空山雲上寺
月ニ雲や四門四物にたゝ是とつ　ちせ我翁
院に定額山善光寺東門にて御堂を東向
なりしを数度焼失より是我中寛永十五
九年壬午五月九日乃出火まて町くおよひ
御堂頼焼を其時大乱進御方本願上人御方
争論此事より是て仮御堂を御当寺此事に

建といへとも入佛再建の令も延引まおよひ
尊像伐堵跡に安置奉りぬ慶安三庚寅年
出入お爲七ヶ年過寛文六丙午年四月十五日
御堂へ遷し奉り元祿元年始て如来
堂建替れ願何事て諸國に勧化何り元祿
十二戌寅年唯今の場所へ地形なり何事て
普請なし爲家同十四庚辰年七月廿一日
下堰小路より出火南風烈敷御堂も賊来を
報捕を因茲再國々勧化なし何事同十
六癸未年より奉普請はしまゝ此時御面院

より梨熟願何りて相代御城主様より普請
支配なして諸役人残なく惣奉行小山田弓銭
始と云て上下の人数百二十五人御配役乃此第八
別録に委舗して爰に異を元祿十六年未此
八月午号改元何つて寶永四年亥迄五ヶ年銭
經て建立何事を善光寺御堂を大
伽藍まして遍久世乃人此知る所なりと
いへとも猶に五ヶ年の建立全未就なるなり
尊敬を屬し此所に御伐爰に記をに
御本堂 桁行二十九間三尺一寸五分 高サ石居ヨリ箱棟迄九丈
梁行十三間七寸五分

坪數三百八拾七坪三合　余者別記委鋪シテ爰ニ畧ス
柱立寶永三戌年四月十六日　上棟同亥年七月朔日
入佛同八月十三日　供養同八月十五日
其余者別錄ニ委鋪シテ爰ニ畧ス

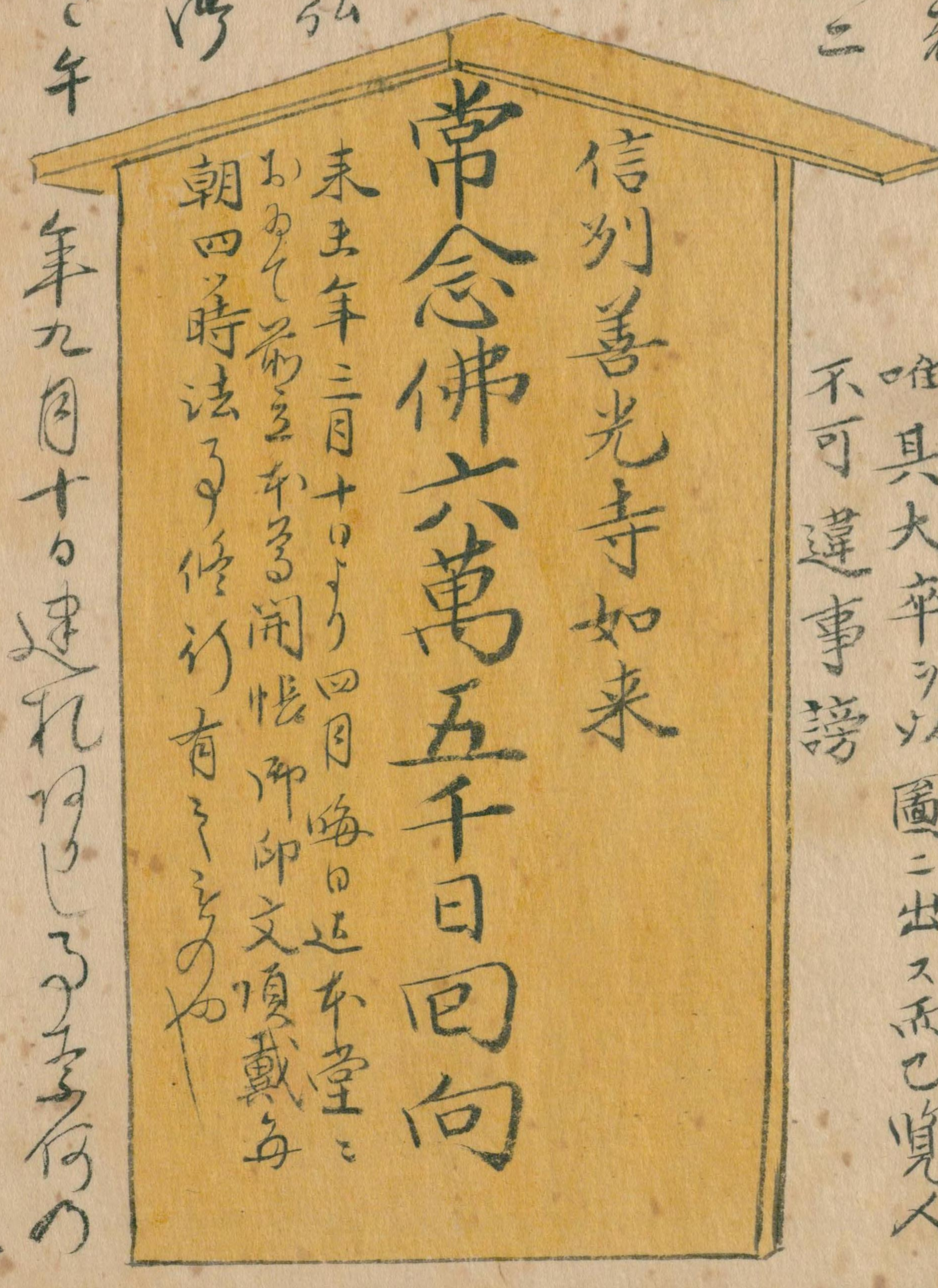
是今の御堂にて諸國より參詣夥しく前代未少の群集にて善光なるの街をいふも更なり近邊向て毛旅宿するこの多し通夜するもあれ御座に充滿すなり事言語に難述しとこと昔時欽明天皇の御代年号なりにて其昔に

後ろ世語ひしより今弘化四年丁未よりて千數百年の大なるを普く世の人乃知る處なるかゝる但他の靈場なれども年増るにまして聖昌し諸國より皇の本納寄附の志なるべく善光城を至る諸人を百里お遠しとせず老若男女ハ往還の足勞を厭しと愛に群集せまる北國往來にして旅人多し御領を入交ゆといへるも世俗に善光寺平と唱ふるその見渡丑寅より未申へ里數十余里東西五六里にて悉平地なりて山國なれども遠近山中より

村々多しいつ道を市町に辨利なりて炭薪
麻木豫雜穀我彩数商ふ北海へ繼十五
六里我謂ふ朝夕に生魚を得流れにまゐる
その是各自かき千曲犀の両川より手我うつて
老李井の元に呼田畑とも二夕毛を耕作
まるの徳なり其外山海の魚鳥四季の野菜
もやしまゐのたるひを呼声終らざるうちに鐶
入り三ヶ子といへども利理を味ひて生死の爾
燒我智形の大なる我重しとし山魚の煙我好とも
能中毛物識ものたるひ諸國の新製新

形我この家に諺に京に鄙なりといひつ通し
志かほ中ふも當所をいふも更なり東南西北の
驛路近邊までも利理格外にして集語群集なるハ
一山の中に常念佛堂なり七八ヶ年の程我
謂て五菊乃至六菊の数を積りて恕回向
なり清る血縁の大なる前立本尊御冥帳有
玉累代の例によりて三月十日より四月三十日まで
日数五十日の間を眠しきる山國邊おまハまし
陽らしといへども世に佛の都と唱ふる我もつて
疑心を發き屋ゆゑ元累例の式化法をとしたん

此札前年十月十夜より
明りて三朝
残り當山ニ
天門前へ
立る事なる
例なりや
能るを今弘
化四未年御
回向ようつき午
年九月十日建札得しるに去夜の
由緒なれば其詳なるを残置候得此御判當大勧進



此札之書方者多分粗略可有之
唯其大率ヲ以圖ニ出ス而已覧人
不可違事謗

大佛頂院權僧正
山海御代也
松代大守様元来の御懇意なる
由寄附候御侗と書て御登城あそ御郷の
節そてるし學詳更善光北御古老物まて
論ハ是て首尾合にしく御角山立ことより
此とき誰いかるも有人皆る銭盧説しく回
十月十夜より札を建る者例るを
去何三十日残なく届もあるへとも建札得るの
事一同落諸色買置残催しまいあとゝた
久しい人寄騒立る二ヶ月を可満と四ヶ月の
亡命通り鳥とて此方御易の仰り書画息の詑

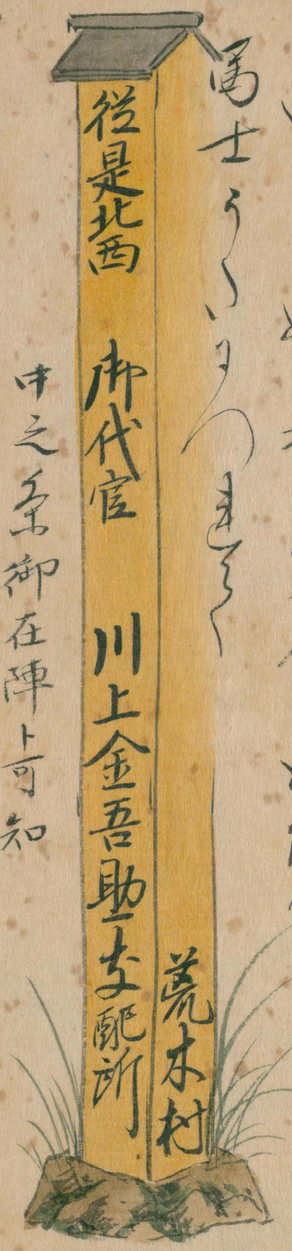
なしと御聖城一所里ゟ此と御許容なし
因茲御四向を空し里たるを此時予も
松城にあるしか御城下町ハ更なり所家中に
おいて大に其ゟ御居なるなり予も四銭痛
悔る語をかゝるも云説よりくなり悔りても
其は是銭同ふて家業連れハ引ぬるを
ゟ御居をる事多くなり是虚況にして
取に大らをといへとも爰に三月二十四日既に
御四向盛にして諸國系諸の旅人銭多人を
なく一時に命銭爰に群死を疑ふらんハかゝる

大災の前表にもあるなるにや
○弘化三年午の十月朔日終日快晴にして二日
雨降後三日天寒にして四日終日雪降五日
終日雪降里午此半刻より雪大いにして
寒氣を覚たる里酉此初刻雷鳴影しく
雨戸障子此間にて其光りを見ます
心耳銭驚きるの尋ね為たる事何大寒雪
中においてかゝる変事有事実に陰陽
昇降乃遅速によるべきや予日記平
志得置たる銭かゝる大地の震ふる銭なるひ

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

小しきやけ東月の浪のうつくに光りを
うつし 初秋告げ侍りかふ野いつまの行
いれるうつらん千曲犀一川に至て北海に
流通名物此川鮭此邊に通り一飄を携
る日海に面白き東行りに吹上の石燈籠
我見當に旅の皆通を見通るや久も善光寺
にいたるまぬるかと宿入馬此給の音をも面白く
馬士うたいまつまたく



從是北西　御代官　川上金吾助支配所

中之条御在陣ト可知

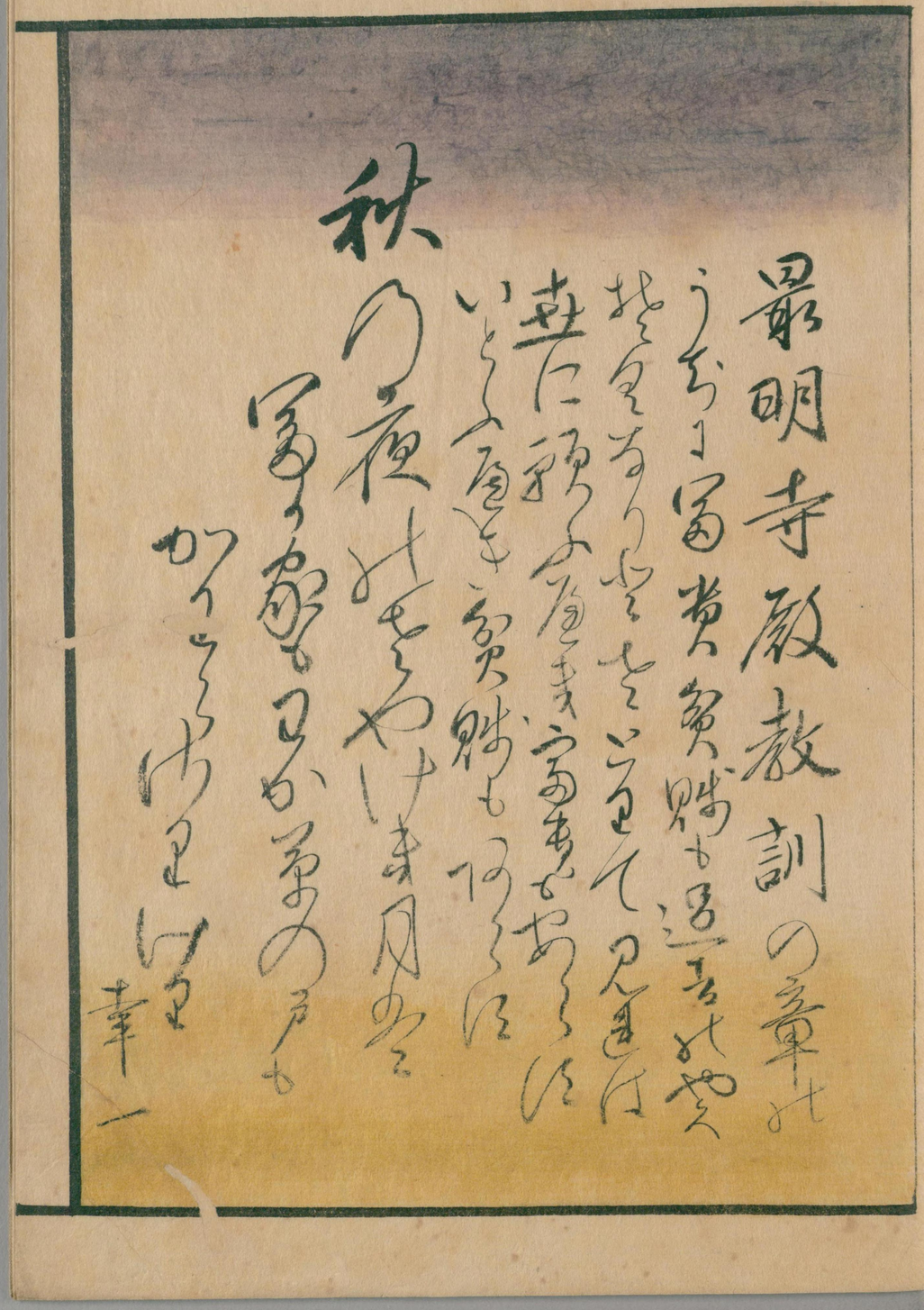
荒木村我ハ人まは中の御所もらすり昔時
征夷大將軍頼朝公建久年中善光寺
集請此刻假御所ハ定め給ひし事ハ
世とせ是爰に大將軍守佛髮の馬
頭觀世音政子御前此守佛正觀音
弘法大師御化地花當安置の御堂ハ
これより三丁徑歩行て石堂村あり
かるゝや親子地藏當の古跡石堂丸の
因縁ハよりて當我石堂村といふ是も先より
御本堂まて左右に為我ハ建つゝ事て

諸商人おもひくに見せ店銭まうけて
家業怠るなりし都て町しの
五僧銭器画の大異銭もつくを吉稲に
近来云まけて整花賑ふまし大かひ一ツ
十万千日至る間て一ツとしてふ足を係
るを来かを況前にも此せり如人者
光る如来御四向とて来年の事銭之日
鬼の御しの人ら年の里
家人におとりと精銭廣我寛銭碎て
刹留の大なるるを二周新製妙

東なるる銭僧を其外旅籠屋茶
店に至り煤を拂ひ行燈を洗えて
年乃あるに銭より或冬芝居或ハ性
業曲馬をそれ遠近に何る也あるゆゑ
評判記を易もとゑ給重雑費ハ多
少銭ろんぜに二周を云ふ事
尋常なる事

最明寺殿教訓の章に
うおに富貴財も過去に然
れ是なり然るを見ては
其に頼ふ事まで富貴もあらば
いとふ事を貴財も何らば

秋の夜にもやけ来月の
富の家も日か菓の戸も
かくしけり
幸一



国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

849
55

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用